



図1 「てんま」による Vela X-1 のフレア

「てんま」は今後、コマクラスター、Cen X-3 へと観測をすすめる。この間に、姿勢ドリフトの性格を理解し、これを最小におさえること、X線検出器の性能をチェックし最適状態にすること、バックグラウンドのふるまいを調べ上げることが主目的に行なわれる。これに並行して共同利用に向けてデータ処理プログラムの整備がすすめられる予定である。

## 5. おわりに

1970 年末「ウフル」衛星が上げられて以後 70 年代後半にはそれぞれの特徴を生かした衛星がいくつも上げら

れた。「はくちょう」はこの期の最後をかざるものである。80 年代に入ると、これらの衛星は次々に機能を停止し残るは「はくちょう」のみとなった。この時期即ち 80 年代前半の X 線天文を背負う衛星として「てんま」は誕生したわけである。このような事情から「てんま」は広く天文研究者に開放される予定である。残念なことに、我国では、共同利用の体制が必ずしも整っているわけではないが、我々としては精一杯の努力をしているつもりである。そこで最後に一言「大いにてんまを利用し可愛がって下さい。」

## 雑 報

### 1983 年 6 月末日に「うるう秒」の挿入

国際報時中央局 (BIH) は、協定世界時 (UTC) に次の「うるう秒」を挿入する日時を 1983 年 6 月末日の最終秒 UTC とすることを決めた。JJY 電波報時などにより日本で通報される標準時 (=UTC+9 時間) の秒信号は 1983 年 7 月 1 日に、

$$8^{\text{h}}59^{\text{m}}59^{\text{s}}, 8^{\text{h}}59^{\text{m}}60^{\text{s}}, 9^{\text{h}}00^{\text{m}}00^{\text{s}}$$

と刻まれ、標準時が 1 秒間遅らされることになる。

UTC は原子振動に基づいた原子時の秒を刻み、その時刻は地球の自転に基づいた世界時 (UT1) から  $\pm 0.9$  秒を超えないように「うるう秒」によって調整されている時系である。1982 年の 12 月中の平均の地球自転速度の変動は原子時にたいして約  $-2.35$  ミリ秒/日で、遅れを示していたが、今年の 1 月末にはその変動が約  $-2.80$  ミリ秒/日となり自転速度の遅れが増す傾向になっている。この遅れがそのまま続く仮定すれば 6 月末には、UTC は UT1 にたいして約 0.4 秒の進みとなる。そのため BIH では、はやめに「うるう秒」の挿入にふみきったものと考えられる。